

佛學
始祖

村上英俊

中
卷

Nagasaki University of Foreign Studies

著書約説

Nagasaki University of Foreign Studies

佛學始祖 村上英俊

中卷

著書解說 目次

三語便覽 二

佛英訓辨 二

五方通語 四

佛蘭西字典及佛蘭西詞林 八

佛語明要及附錄 二〇

英語箋及後篇 二五

佛蘭西答屈智幾 二六

西洋史記 三

佛英三國會話 吳

佛學

Nagasaki University of Foreign Studies

始祖 村上英俊 中卷 一 藤松堂書店 古典部 版

雷酸金之說 完

醫學譯述論文 完

茂亭漫筆 四

(附) 達理堂門人名簿 四

...

...

...

...

...

善書雜記 目次

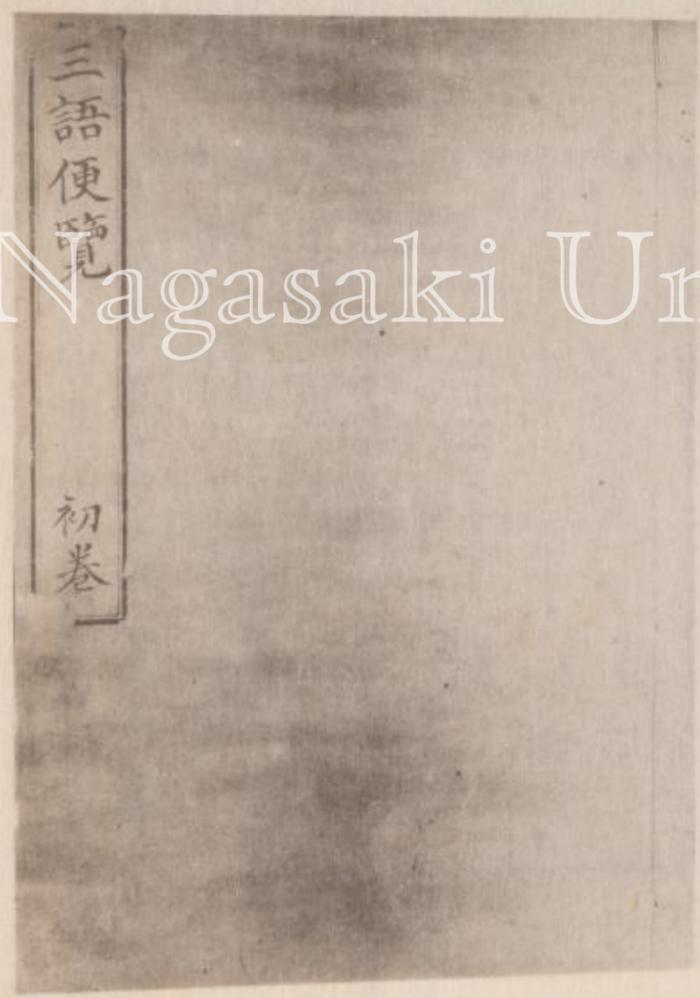
...

中卷

Nagasaki University of Foreign Studies

三語便覽

初卷 中卷 終卷 三册 和本 縱八寸六分 橫六寸



三語便覽表紙

佛學 寸 仁 氏 受 口 卷 二 長 及 堂 書 行 行 具 部 反

雷酸金之說 三

醫學譯述論文 三

茂亭漫筆 四

(附) 達理堂門人名簿 四

醫學譯述論文

茂亭漫筆

雷酸金之說

醫學譯述論文

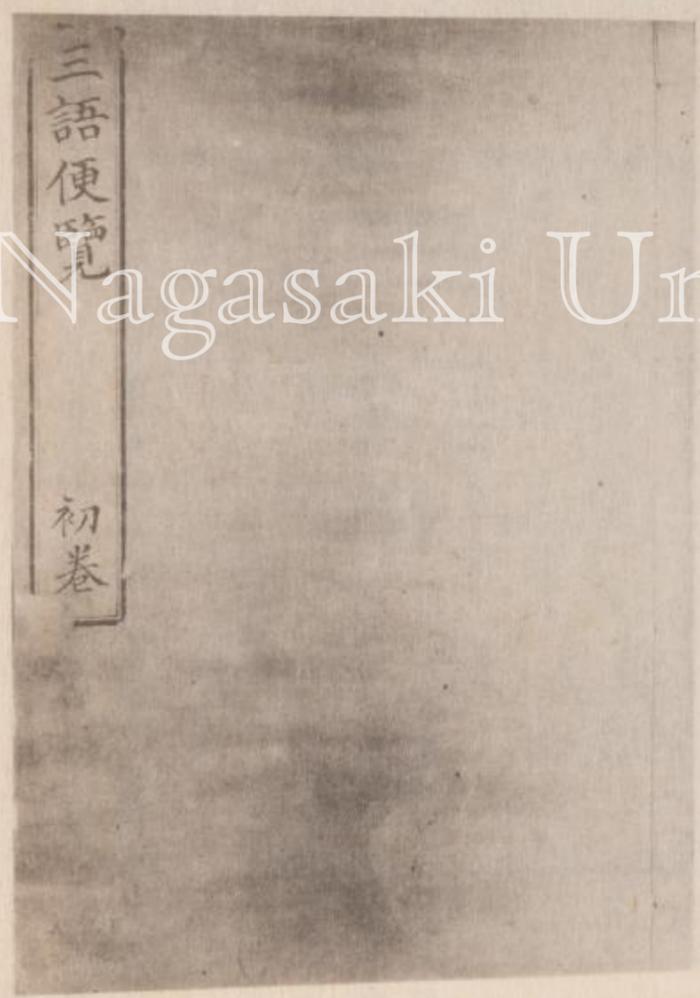
醫學譯述論文

茂亭漫筆

中卷

三語便覽

初卷 三册 和本 縱八寸六分 橫六寸



紙表 覽便語三

Nagasaki University of Foreign Studies

始祖 林上 英俊 叶卷 二
 藏松堂書店 古典音版



返見 覽便語三

表紙	色	紺	
見返	色	淺葱或は赤	
初巻	引	二	鹽谷世弘
	序	二	小林至靜
	凡例	二	著者茂亭
	目錄	一	
中巻	本文	六十丁	
	本文	六十三丁	
終巻	本文	六十二丁	

右肩に押捺してある朱印は直徑二寸七分、周圍の模様は鑑別し難い。内部は毛彫で水平線の彼方に突兀たる山嶽が重なり、將に入港せんとする外舶その間を進んで圖の中央にあり、これを待望せる洋装の男女らしきものを下方に配してある。蓋し泰西文化を象徴せるもの、初期洋學者としての英俊の希望と抱負を付度するに足る。此の印の外郭不明の部分は、後には全く削除せるものの如く、西洋史記等にはこれを見ず、直徑二寸五厘の内郭のみとなつてゐる。(印譜参照)

奥附は左の如きもので、各巻共に附してある。そして「五方通語」卷之三の終りの奥附はこれと全く同一である。本書の成つたのは鹽谷宿隱、小林至靜の序文に知らるゝ如く嘉永七甲寅(安政元)年である。然るに奥附の刊記は安政四丁巳(五月)である。刻成つて四年間のへだたりのある事及び「五方通語」と全く刊記を同じくしてゐる奥附を持つてゐる事に多少の疑點をさしはさむものであるが、事實

始祖 村山英俊 三冊 附典覽便語三

村山英俊著

三語便覽二篇 三冊近刻

安政四丁卯年五月

江戸日本橋通二丁目

山城屋佐兵衛

發行 同 浅草茅町二丁目 須原屋伊八 書林

附典覽便語三

再版本ありと報告し來るものあり、調査の上若し實在せば、下巻卷末に追記して此の解説の缺を補ふべし。

初刷の發賣が安政四年であつたのであらうか。尤も「三語便覽」は再版の時に佛、英、蘭を佛、英、獨に改めたと言はれてゐる。この再版の年月は明でないし、再版本は印行されなかつたとの推定を下すものであるが、兎も角も本書が初版である事は佛、英、蘭によつて明瞭である。然も奥附は同一であり乍ら「五方通語」より以前に世に知られたと思はれる節は、安政初年の交、佐久間象山が倉田左高に送つた次ぎの二通の書簡に徴して分る。

涼氣には相成候へども散々の雨にて昨夜も遂無月御同然遺憾之事に御座候ひさ然ば村上英俊三語便覽とか申もの拵へ候よしの品間違未だ見不申貴兄などへは一本呈し候趣に候御手許に御座候はゞ一寸御借示被下度奉希上候 以上 及び、

昨日は珍物御投惠被下感荷淺からず奉謝候然ば御示し被下候三語便覽一寸致寓目候處訛誤以ての外に多く散々なる著述と存候右へ松代など題し候事恥かしき次第本藩無人を世間へ知らせ候様のものにて扱々氣の毒なる事と存申候右は只今にても改可申事存じ候其儘差置候てはいかにも恥辱なる事に候間此事内々御心づけ被遣可然と奉存候家父内々致轉覽誤り多くいかゞと申候趣にても苦しからず候間其事昨日の御禮旁得貴意候様申付候まゝ如斯に御座候 以上 とある。「三語便覽」各巻第一頁には「松代 茂亭村上義茂著」と題してある(寫眞)が、かゝる批難の故にや「五方通語」以下の著述には松代二字を冠してない。加之この手紙に「三語便覽」のみについて言つて居る所よりしても、世への頒布は「五方通語」以前と見てよいかと思ふ。

佛學 寸 七 卷 變 申 卷 四 慶公堂書局刊

始祖 木 一 三 始 祖 木 一 三 始 祖 木 一 三

所が本書解説の底本にした以外に零本の所書初卷一冊を仔細に檢する事が出来た。それによると表紙にはの連絡模様又別本には紗綾形模様が認められ、表紙裏は赤色、右肩に印なく、卷末に奥附並びに廣告の頁が有り加之、全體の紙もやゝ古くして上質に感じられる。依つて、これこそ初刷本で、底本にしたものは五方通語と同時に賣り出した後刷本と見るのが適當であり、然らば即ち所謂改訂再版本の刊行の事は益々疑はしいといふ事になる。

卷頭二丁に亘つてこれが要を説いた三語便覽引は、當時江戸第一流の儒者岩陰鹽谷世弘の撰する所である。曰く

松城村上棟梁編三語便覽成人或謂之曰無用之書不作而可予曰曷觀清與廓爾喀之事乎道光中英夷侵廣廓爾喀使告於清曰吾國與里底所屬之披地刺鄰每受其侮今聞里底與京屬構兵願攻里底屬地以掎角之清人不曉答以蠻觸相攻天朝向不過問却之後知京屬謂廣東省里底即英夷屬地云者謂東印度孟加蘭乃大悔矣不諳夷語之失有如此者焉且英與佛外和而內實相忌皆洋夷之尤狡者也而蘭居其隣比與我爲舊好國家若有事於英亦必有事於佛亦必有事於英方其時蘭豈無如廓夷之於清者乎則通此三邦之語者亦邊備之要務必不可闕也且夫兵者知彼爲要當室町之季我亡卒逋徒綴明明人欲索我情有合彼我語對音者有詳記將棋戲者有翻三十一字爲五七七句者今之洋夷皆我敵也欲審其情而不通其語惡可謂者默然蓋棟梁之著此書非專供邊防之用也然在不解洋文如吾曹者其爲用猶如是其切況於洋學專門之士乎及棟梁請序理前言引諸簡首

嘉永七年甲寅夏月

次ぎの序は、松代藩儒畏堂小林至靜の物せる所、文に曰く、本藩醫官村上英俊有才嗜學頃日携所著三語便覽來際余曰刀圭餘暇成茲小冊請題一言受而讀之荷蘭及暎拂三國之語採其切於日用者而對照之邦語可謂用力勤矣抑國之治亂壹係氣運盛衰我豐公之伐朝鮮山田長政之入暹羅一舉千練百鍛之兵以擊并平游惰之民一以我國已治奮臂於他邦以逞勇武之氣時勢然也今也西洋諸蠻以廣互市恢疆域爲務乃欲窺我以盈其慾故屢來乞薪水或送致漂民以示信是其意實不可測則其情亦不可不審也凡知事情必在於讀其書讀其書在於學其字學之至此亦時勢之宜爾若夫大海中星羅雲布之洲國異其俗又殊其語奚翅茲三國而已乎雖然余嘗聞之除我與漢外大抵橫文之國其語大同小異就中三國之語所謂羅甸獨逸及斯刺勿泥亞語者居多故損益取捨施之諸蠻而無不通者况彼諸蠻既已讀我字而解我事則我亦不可不知彼也是英俊所以有此著也歟余竊謂世人須讀聖賢之書而後學蠻書若不然必陷異端惑妖教者矣英俊好讀漢籍而及蠻書宜其著書之適世用也刻竣聊書所見以辨之

嘉永甲寅孟冬

引並びに序は共に澤俊卿の書記になる。凡例は著者の識す所、その全文は文集に載めて置いたが、これによつて三語便覽を著す趣旨は専ら明かである。

近代西學大開諸家譯書爲初學楷梯者頗多然爲原書楷梯者尙稀余因述此書以便讀原書者」余著此書也欲使後進博學洋書也學者勉強而通達于諸洋學然後應大益于天下是余自隗始之意也」又從來全く我が國語には聞く事の出来なかつた音そのものに假名で發音を施すの難事業たるは想像

始祖 林 一 芳 佐 山 卷 三
 林 堂 書 成 古 典 詳 解

に餘りある。此處に多くの訛誤と誤謬を來す虞れはまぬかれぬ所であつた。これについて彼は凡例中に次ぎの如く辯じてゐる。

以我邦字記其字音固不能得其穩當亦示大略而已強欲其字音至精而用字細密則猶媿女倣西施不得其美祇足益其媿耳」

内容目録は次ぎの如くて、各卷收載語二十五類に分つてゐる。

- 初 卷 天文 地理 身體 疾病 家倫 官職 人品 宮室 飲食 衣服 器用
- 中 卷 兵語 時令 神佛 德不德 禽獸 魚虫 草木 果實 金石 醫藥 采色 數量
- 地名
- 終 卷 言語 (陪名詞 附前 前置詞 附合詞 動詞)

これが二十五門分類の典據は明かになし誰かつた。「和爾雅」、「千字類合」、「嬉遊笑覽」等何れも二十四類に門を分つてゐるが何れも夫々別個のものである。「節用集の研究」にも見當らない。恐らく世に流布した各種の辭典節用集の類から取捨し適當と思はれるもの二十五種を得たものであらう。

本書收載語數、初卷一千七拾六語、中卷一千百三十一語、終卷一千百六十八語、總計三千三百七十五語、事實は三ヶ國語を集むる故この三倍一萬語を越ゆる譯である。三ヶ國語を收載した爲め語數が自然少なくなつた事について、著者はその凡例中に讀者の諒恕を乞うてゐる。これが收載の形式は寫眞の示す通りであるが、一部門一二語の例を左に示しその分類内容を知るよすがとし、且つ各部門下に便宜收載語數を示して見た。

三語便覽		初代		茂亭村上義茂著	
天文	佛語	英語	和蘭語	物	天地既成
身體	疾病	禽獸	魚虫	草木	果實
金石	醫藥	采色	數量	地名	言語
家倫	官職	人品	宮室	飲食	衣服
器用	衣服	器用	器用	器用	器用

三語便覽初卷 第一丁

佛學 寸 二 卷 六

佛蘭西語

英傑列語

和蘭語

晩霞

aurora-boreale

(天文) 六〇三語

north light

noorderlicht

村市

bourg

(地理) 九五語

town

vlek

不平顔

moût

(身體) 一八五語

grim-face

grynzig gezigt

頭痛

mal de tete

(疾病) 一二五語

head-ake

hoofdpijn

善管家女

bonne menagere

(家倫) 八四語

good woman house keeper

goed huis houdster

壯年

age mûr

(官職) 八七語

ripe age

typerjaren

市長

bourgie maitre

(人品) 一五二語

burg master

birge meester

先生

precepteur

(宮室) 五六語

schoolmaster

leermeester

大學校

universite

(飲食) 六九語

college

hoogeschool

晩飯

soupe

(衣服) 四〇語

supper

avondmaal

短掛帽

manteau

(器用) 一一〇語

mantle

mantel

冠

bonnete

(器用) 一一〇語

cap

muts

提琴

violon

(器用) 一一〇語

violon

viool

寫字匣

etui a peignes

(器用) 一一〇語

comb box

kamdoos

野戰

bataille

(兵語) 二五九語

fieldfight

veldslag

秋

automne

(時令) 五二語

automne

herfst

每日

tous les jours

(時令) 五二語

every day

daagelyks

(以上初卷)

始 祖 神 佛 八 本 誓 一 〇 七 語 一 〇 三 語 七 一 七 語 佛 八 本 誓

天 ^テ 堂 ^{ドウ}	(神) 佛) 八本誓	purgatoire	purgatory	vagevüür
禮 ^{レイ} 法 ^{ホフ}	(德不德) 一〇七語	moralite	morality	zedelykheid
耻 ^シ 辱 ^{ジュ}	honbe	shame	schamte	
豕 ^シ 家 ^カ	(禽) 獸) 一〇三語	cane	düek tanne	eend
蝶 ^テ	cochon	swine	varken	
櫻 ^{オウ} 樹 ^{ジュ}	(魚) 虫) 四八語	papillon	metterly	wilje
櫻 ^{オウ} 樹 ^{ジュ}	(草) 木) 七三語	cerisier	cerry tree	kereboom
甜 ^{テン} 瓜 ^カ	(果) 實) 四五語	melon	melon	meloen
銀 ^{ギン} 線 ^{セン}	(金) 石) 四〇語	fil d'argent	silver wire	zilverdraad
	(醫) 藥) 二九語			

即 ^{ソク} 功 ^{コウ} 藥 ^{ヤク}	prompt	speedy	spoedig middel
桃 ^{モモ} 色 ^{シキ}	(采) 色) 二三語	peche couleur	perzik kleür
一	(數) 量) 二六語	tin	tin
二	deü	two	twee
三	trois	three	drie
四	quatre	four	vier
五	cinq	five	vyft
六	six	six	zes
七	sept	seven	zeven
八	huit	eight	acht
九	neuf	nine	negen
十	dix	ten	tien
第十九	le troizieme	the third	de derde
亞默利加	(地) 名) 二二八語	americque	amerika

佛 學 寸 一 一 〇 七 語 一 〇 三 語 七 一 七 語 佛 學 寸 一 一 〇 七 語 一 〇 三 語 七 一 七 語

始祖 木上英修 中巻 八
 始祖 木上英修 中巻 八
 始祖 木上英修 中巻 八

初版本に空白なりし
 外國地名三ヶ國語欄は
 後刷本に至り、全部補
 充せられたり。

極失寧例苦	奥地利	奥地利	奥地利
別爾偶	比利时	比利时	比利时
捕律設魯斯	布鲁塞尔	布鲁塞尔	布鲁塞尔
意大利亞	(原本空白)		
移爾蘭土	(原本空白)		
龍動府	伦敦	伦敦	伦敦
把列斯府	(原本空白)		
今	(陪名詞) 二人三語	new law	niefwerwetsch
可	moderne	worthy	wardig
可	digne	possibly	mogelyk
多	possible	idletalk	snaspachtig
于	babillard		
于	(附 詞) 二四四語		
通	de tous cotes	tot all side	aan alle zyden
通	par detours	through	door wegen
不	simplement	simply	eenvoudiglyk

(以上中巻)

周	因	因	代	非	則	牽	輕	粧	示
園	其	其	而	而	而	破	思	飭	證
(前置詞) 四一語	(附合詞) 五二語	(附合詞) 五二語	(動詞) 五三語	(動詞) 五三語	(動詞) 五三語	(動詞) 五三語	(動詞) 五三語	(動詞) 五三語	(動詞) 五三語
adroit	al egard	en vertid	ad lieu que	non seulement	ou cas que	dechirer	imaginer	parer	persuader
round about	in regard	on the account	in stead of	not alone	in case that	to tear in peaces	to imagine ones self	to trim tip	to convince
rondom	ten aanzien	dit hoofd	in plaats dat	niet alleen	in geval dat	verschietren	zich inbeelden	optooyen	overtuigen

(以上終巻)

本書の價値に就いては遽かに斷じ難いが、我が國に於ける佛語辭典の濫觴として、又三ヶ國語を對照せしめて一目瞭然たらしめたる考案に於て、先人の努力は認めらるべきである。その發音法は佛も英も共に和蘭流のものであり、その和蘭流の發音と雖も決して正鵠は得てゐない。佐久間象山の手紙

始祖林... 九

に「訛誤以ての外に多く散々なる著述」を難し、宥陰の引に「人或謂之曰無用之書不作而可」の文を見、英
 俊書簡中に「評を打候者有之候共俗に予人盲目のかき覗き云々」とあるのを見ても、批難する者は相當
 あつたらしい。蓋し止むを得ない所であらう。たゞ語書として、蘭語を解する者をして尚佛、英の二
 語を知らしむる等、裨益する所僅少ではなかつたらう。又外國音を國字音化する困難と同様に、外國語
 に該當する國字採擇の苦心も一方ではなかつたらう。この意味から、現今の明快な翻譯語をさぐ
 り當てるまでの摸索時代のものとして、翻譯語を見る事も興味ある問題である。たゞ本書が洋字を取
 扱ひ乍らその語の輯録の範を和式即用語に倣つた爲めに、語の檢索に不便であり、字書としての職能
 が十分發揮出来ないうらみがある。如ふるに語彙の貧弱であつた事は、事實上著者が庶幾したやうな
 初學者の用をなさなかつたかも知れない。然し本書がこの三冊を以つて完結したのではなく、前掲奥
 附の廣告に見らるゝ如く二編三冊を續刊する筈であつた。然しこれは實現を見るには至らなかつた。
 尙本書には各卷最終丁と奥附の間に一丁を加へてその両面を英俊著述の廣告としてゐる。今便宜左
 にこれが寫眞を掲げ、他の著述についてはその條下に解説を試みる事にする。たゞこゝに解説した所
 は奥附の廣告に従へば所謂一篇三冊に當り、廣告頁によれば前篇三冊であり、従つて、後篇三冊も二
 篇三冊も同一物である事を附記する。

茂村上先生著述	三詞便覽 前篇 三冊	五方通語 初篇 三冊
	三詞便覽 後篇 三冊	五方通語 二篇 三冊
英語文 前篇 三冊	佛語明要 八 近刻	
英語文 後篇 三冊	佛蘭西字典 十六冊 寫本	

三語便覽卷末 村上英俊著目録

佛學寸七 茂俊 中 卷 十 殿公堂書古古典部版

始祖林山第餘中後
一峰林掌書店
藤林堂書房
正身洋房

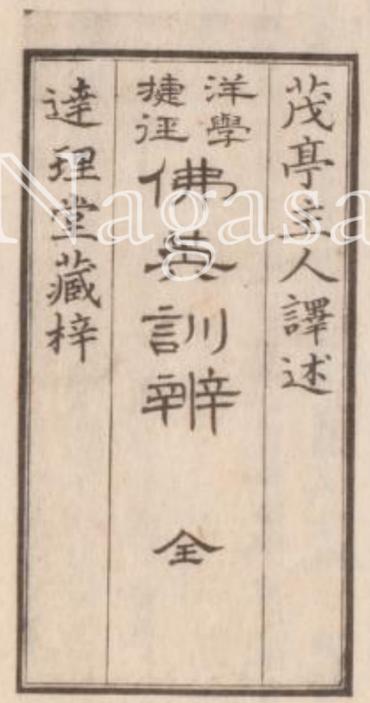
佛英訓辨折本 (二十三折)

表紙 色 黃 紗綾形模様

縦五寸四分五厘 横二寸四分五厘



表紙



裏見

佛學寸上卷 中卷 十一 菱公堂書局刊行

Nagasaki University of Foreign Studies

始祖 林 山 英 中 物 後 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

ふ傳へはあるが、今はその行方を知り由もない。察するに一種の教科書の如きもの、翻譯ではなかつたか、しばらく疑を存して博學の士の示教を俟つ事にする。
 後篇ともいふべき部は、M氏の「和英語彙」の一部分の譯述で、ローマ字の綴方をも教へ、イロハ及びその濁、半濁音のローマ字表も添へてある。綴方の例は、
 鳥銃ハ *teppō-ō* ト書スベキ者アリ然レドモ此ノ如キ類ハ *teppō-ō* ト書記スベシ
 の類である。

今左に和英對譯の例を抄出すれば(イロハ引)

邦字	漢字	英之訓字	英傑列斯語
イシビヤダイ	炮坐	<i>ishibiyadai.</i>	<i>battery.</i>
イセイ	勢	<i>isei.</i>	<i>night.</i>
ニツボン	日本	<i>nippon.</i>	<i>japan.</i>
ガクニン	伶人	<i>gakinin.</i>	<i>musicians.</i>
ノリバケ	刷毛	<i>norihake.</i>	<i>paste brush.</i>
マンゲツ	満月	<i>man gets.</i>	<i>full moon.</i>
テイコク	帝國	<i>teikoku.</i>	<i>empire.</i>
アヤシキ	可怪	<i>ayashi-ki.</i>	<i>wonderfull.</i>
メイイ	名醫	<i>mei i.</i>	<i>famous doctor.</i>

最後に、左の如く九品詞をあげてみる。

品名	品類	例	品名	品類	例
articles.	知質詞	syo-mots.	動詞	動作詞	book.
substantives.	實名詞	mon ko.	代名詞	代名詞	door.
adjectives.	陪名詞		附合詞	附合詞	
pronouns.	代名詞		前置詞	前置詞	
verbs.	動詞		嘆息詞	嘆息詞	
adverbs.	附合詞				
conjunctions.	附合詞				
prepositions.	前置詞				
interjections.	嘆息詞				

これが譯述の原本は、英人面獨比爾の千八百三十二年天保三年になつた邦語對照の詞書で、それは日本語を學ばしむる爲に作爲されしものなる趣が記してある。

面獨比爾氏は W.H. Medhurst (1796—1857) で、東洋支那、爪哇方面にキリスト教布教に來てゐた英國宣教師で、東洋關係の語書を多く編述してゐる。本書はそのうちの一冊“An English and Japanese and English Vocabulary,” (1830)の後半部、和英の部、の抄譯的紹介である。英倭

始祖
木
上
英
佛
中
卷
一
十六
樹
堂
書
成
古
典
音
凡

五方通語卷之一

茂亭村上義茂著述

天文	納	落日	calice de soleil	佛	sun	日	英	sun
羅異域志	沙彌國	係日西						
沒之地	日入聲	若雷	建國王	每於城上	聚千人			
吹角	混雜	日聲	不然	則小兒驚死	雷雷公			
羅易繁辭	動萬							

丁一第 一之卷語通方五

共に本書の第二編も計畫のみにて到底には至らなかつたのである。本書の奥附は三語便覽のものと全く同一物であつて、それについては既に三語便覽解説の所に記して置いた。但しこれは卷之三の終りに奥附を有するのみである。尚通語本文第一頁の寫眞を示し、且つ語例をも採擇して左に掲げる。

伊之部

【時令】 上古。往古。前古。昔時。前世 *temps antiques* 佛 | of old time 英 | *oidelyda* 蘭 | *quondam* 羅。

波之部

【地理】 橋 *pont* 佛 | *bridge* 英 | *brüg* 蘭 | *pous* 羅 | 朱弁橋記 | 造舟為梁見於詩而征權倚約雜出於子史若橋之為名則始于商而獨著於周書逮秦漢乃各冠以地或因水而稱【說文】橋水梁也權水上橫木所以度也亦曰約今謂之略約東楚謂橋為圯

保之部

【宮室】 理刑廳。審事。政廳。 *court of justice* 佛 | *gerechtshof* 蘭 | *curia judicialis* 羅 | 聞奇錄 | 京兆府判司持云東土曹廳則號為念珠廳蓋判案一百八道西土曹廳為沙廳廳前有沙周廻可二十五步

土之部

【言語】 風説 *fruit* 佛 | *report* 英 | *gerucht* 蘭 | *rumor* 羅 | 知之部

知之部

【飲食】 茶 *the* 佛 | *tea* 英 | *thee* 蘭 | *thea* 羅 | 爾雅 | 檟苦茶一註 | 樹小而如梔子冬生葉可煮作羹

佛學 寸 七 五 六 一 七 長 八 公 堂 書 行 二 凡 反

始祖 祖 木 山 菊 傳 中 卷 一 十 一
始 祖 木 山 菊 傳 中 卷 一 十 一
始 祖 木 山 菊 傳 中 卷 一 十 一
始 祖 木 山 菊 傳 中 卷 一 十 一

飲、今呼早采者爲茶晚采者爲茗、茗、蜀人名之、苦茶、實錄、唐德宗正元九年、初稅茶、先是鹽鐵使張滂奏請稅茶、以待水旱之闕、詔曰、是歲得錢數十萬、「滴露漫錄」茶之爲物、西戎土蕃古今皆仰給之、以其醒肉之食、非茶不消、青襟之熱、非茶不解、是山林草木之葉、而關係國家大徑。

奴之部

【器用】 戀書。艶書。 lettre d'amour 佛 loose publications 英 miniature 蘭 epistola anatolia 羅

遠之部

【衣服】 帶。 ceinture 佛 girdle 英 girdal 蘭 fascia 羅 物原 軒轅始作帶、頤頤製條、逸雅 帶帶也、著於衣、始物之繫帶也、老學菴筆記 古謂帶一爲一腰、猶今謂衣爲一領、周武帝賜李賢御所服十三環金帶一腰、是也、近世乃謂帶爲一條、語頗鄙不若從古爲一腰也

本書は三語便覽の三語を更らに進めて五方に通ずるものたらしめたといふ點、三語便覽の擴張の趣がある。その佛英蘭に更に羅及び葡語を加へたる勞を多としなければなるまい。而も語書として、三語便覽の見易さに比して組立てが複雑で檢索に不便である。この點語書としての本書は、形式上正に退歩である。これは雜字類編に範を取つた爲であつたかも知れない。兎に角、三語便覽といひ、五方通語といひ、英俊の一種の試みで、彼の庶幾した眞意は分るが、言はゞ慾が深かすぎ、かくしては語書としての完璧を期する事が不可能である。彼は「三語便覽」及び「五方通語」の先覺的試作が成功したとは考へなかつた。二者の續編が何れも未刊に終つた事がそれを物語つてゐる。猶英俊の著述の他の全部が黄色表紙であるのに、本書が紺表紙である事は注意される。

佛蘭西字典及佛蘭西詞林

佛蘭西詞林は、その名を聞く事久しく、而もその原物を見るに至つてゐないものである。安政四年の著述に系る。而も本書は稿本のまゝ藩主の手を経て幕府に献上した。五年開成所の教授手傳に任せられ、次いで外國翻譯方を命ぜられるに至り、餘暇を以てこれが増補を爲し、約五千葉の辭書に仕上げたのである。英俊が安政五年（推定）源太夫に宛てた手紙の中に左の文がある。

(前略)

先年御骨折にて公儀へ獻呈被成下候佛蘭西詞書調所へも一部差置度旨に而古賀先生より被命昨今は右之調べに而寸暇無く候比度は又々増補致し三千二百枚之物に相成候私儀も長く後代へ傳り候事故今一骨折仕改正増補可仕と日夜極苦仕居候(下略)

即ち佛蘭西詞林は、彼の言に従へば佛蘭西詞書である。而もこれは上梓さるゝに至らず、公儀へ獻じたのも寫本のまゝであつた。その言は詞林であつたか詞書であつたか、その何れでもよかつたのかも知れない。が何れにしても右の語書は現在その所在が明かでない。尙注意すべきは「三語便覽」の條に掲載した英俊著述廣告中に「佛蘭西字典十六冊寫本」とあることである。三語便覽の刊年に就いては、既にその解説に述べた所であるが、便覽の奥附安政四年を考へると、全く佛蘭西詞林の著作年代と合致する。で私をはじめか考へた。佛蘭西詞林は取りも直さず「佛蘭西字典」の事であつて、その量は十六冊より成り、これが即ち増補以前の姿である。これを公儀に獻じ、又開成所の爲めにも残してお

始祖
木
英
後
安
准
票
年
四
政
安
井
上
修
理
校
正
英
語
箋
及
後
篇
前
篇
三
冊
和
本
橫
八
寸
五
分
縱
六
寸
最
松
堂
書
店
古
典
音
版

英語箋及後篇

前篇三冊
後篇四冊

和本

縱八寸五分
橫六寸

准票年四政安

村上英後閣

英語箋一名米

井上修理校正

AN
ENGLISH AND JAPANESE
AND
Japanese and English
VOCABULARY
COMPILED FROM NATIVE WORKS
BY
W. H. MEDHURST
BATAVIA.
PRINTED BY LITHOGRAPHY
1839

英語箋 見返し牌

佛學寸上英後閣
卷二十一
英八寸五寸五分

始祖
治
木
上
身
先
三
二
高
松
本
堂
書
屋
古
身
音
尾

慶應三年稟准

佛蘭西
的悽那限
村上英俊
原撰
譯述
答屈智幾

達理堂藏

返見 幾智屈答西蘭佛

表紙	見返	卷之一	卷之二	卷之三
色金	淡赤	序文 二二頁	本文 三十三頁	本文 三十六頁
		目錄 二頁	本文 三十三頁	本文 三十六頁

(但し二、三卷は無地楮紙)

右肩の圓印の外に達理堂藏の下に「棟梁」の印が横に押捺してある。
奥附は卷之三の終りに

東京府日本橋通二丁目
山城屋兵衛
同 浅草茅町二丁目
須原屋伊八
發行
書林

この奥附(明要に同じ)によつて見ると、見返しに慶應三年稟准とあるが、出版は明治に入つてからの

佛學 村上英俊 中巻 二十九 菱公堂書写古書反

事に屬する。東京府とある事がそれを證してゐる。

原著者「的樓那限」及び書名「佛蘭西軍用智幾」は De Ternaye, Traité de Tactique; Paris, 1832, 2 vols. et atlas, である。即ち全二卷に附録として地圖が添へてある。原著を寓目してゐないが、此の譯書より推すと、本書が、Ternaye の Traité de Tactique の全譯ではないらしい。それは本書劈頭に行軍篇とある所よりしても、原著のうち最重要なる戰術を論じた行軍篇のみを摘譯した事が分るし、譯書の分量よりするも、全譯とは一寸思考し兼ねる。その行軍篇の全内容を卷別に示せば左の如し。

卷之一 敵ノ彈丸至ラザル所ヲ爲ス行軍

常 行 軍

急 行 軍

迅 行 軍

卷之二 諸軍隊敵近キ所ヲ爲ス進行ノ論

攻撃行軍ヲ爲ス事

前面行軍ノ作業

卷之三 側面行軍ノ法

前面ト側面ト變化スル行軍ヲ開ク事

軍隊ノ一部側面ヲ進行スル隊ニ他隊ハ前面ヲ進行スル行軍ヲ開ク事

卷之一の最初に二十四丁に亘る長序文がある。述ぶる所各國の有名なる兵學者の戰術、及びその

効用と聯關し、テルナイの新戰術のすぐれてゐる事、そしてこの戰術が速かに採用せられん事を望むと結んである。行文剛直なる直譯體であつて、文意を酌むに難い。この序者はテルナイ自身でない事は文中屢々「テルナイ君」とある事などから分る。はじめ譯者の序かとも思つたが、「我國ノ兵學者テルナイ君ノ兵法」とあるので、當時佛蘭西の軍部のものか、或はテルナイの先輩知友が物したものであるといふ想像だけが出來た。勿論序文者の名は缺いて空白である。

扱て、本書が我が國の戰術兵法に幾何の寄與をなしたかは徵すべき文書の寓目したものがないが、佛蘭西兵法の世界に冠たりし事は我々の記憶に新たな所である。

銃槍が採用されはじめたのは第十七世紀の終りであるが、第十八世紀初頭に至つて、從來の槍は廢止され歐洲各國軍が一般に銃槍による戰術を持つに至つた。即ち射撃の効力を主眼とした横隊戰術がこれであるが、この生命は七年戦争後尙餘端を保つてゐた。然し佛國革命戰に至つて全くその終りを告げた。而してこれに代つて生れて來た新戰術が縦隊戰術であつて、歐洲を震撼せしめたナポレオン一世の戰術中にはこれが採用されてゐたであらう。この新戰術は遂に全世界を風靡してしまふのである。

日本に於けるナポレオン崇拜は、一は彼が一代の英傑であつた事にもよるが、更にその直接原因は憂國の志士我が邊防の急を知つてこれが對策に焦慮し、造艦に、砲臺に、これに要する最新の火藥製造に、又は陸軍の新戰術にといふ點に心を向けた。そこに佛蘭西は儼として存在してゐたのである。そしてこれを統ぶる英傑奈翁が在り、當時ナポレオンは恰も全世界に君臨するの觀をさへ呈してゐた。佐久間象山等の奈翁崇拜は其の極に達した。象山嘗て賦して曰く

第十紀百年戦争 (三六一—四三三)
 第十二紀歐羅巴之定 (七二—一四三)
 卷之十二：第十冊(六十一丁)

見返しは前掲の寫真で分明であるが、これは上古史と中古史の最初、即ち第一冊第六冊にあつて、その相違は、欄外の稟准の年が中古史は明治四年となり、タイトル西洋史記の下の上古史が中古史と變つてゐるのは當然である。その他神代等既に説明した如くである。又奥附は上古史と中古史の終り即ち第五冊目第十冊目にあり全然同様のもので而も佛蘭西答屈智幾の奥附と亦同一である。刊記はこれを缺いてゐるので便宜稟准の年月を推ふより外ない。

初卷五十六丁のうち英後の自叙二丁凡例一丁緒言一丁を含む。自叙(文集參照)言ふ所「史者紀治亂興廢安危存亡之事跡以爲後世鑒戒者也」と史の要より説き起し、これは「遂令人悔過改行爲賢良方正之士矣故可謂國家大典也」と言ひ、皇朝には古事紀以下、漢土には春秋以下の史書があつて全いが、萬國史の全備するものがないので譯述する旨に及んでゐる。これが記述は明治二年秋である。

凡例は原書、原著者の事及び文中所々に「茂按」として註を加へて置いた事を記してゐる。扱て凡例によると「原書佛蘭西人駝僕屢氏著述而千八百六十五年之版也其文簡而約易而明令讀者燦然通曉其事理」云々とある。この原書及び原著者を今適確には知り難いが Gabriel Daniel (1649—1728) にはあるまいかの想像を下しうる。彼は Jesuit 僧團に入り Rouen 大學の神學教授にもなつてゐる。「Histoire de France」や「Histoire de la Milice française」等の名著を残した。然して西洋史記は前者「佛蘭西史」の譯述ではあるまいかと思ふのである。尤も原書との對照が出来ないので論斷は

しない。第一自叙中に「譯佛蘭西人著述萬國史名曰西洋史記」とあるのと凡例中に「千八百六十五年之版也」とある解釋である。Histoire de France は一七一三年版三冊巴里刊である。然し本書は其の後



稿原丁一第 卷一第 記史洋西

版を數回重ねてゐるから英俊譯述の底本が著者 Daniel 歿後の重版本と見ればよいのだが、萬國史の名に適しない。然し歐洲一帯を色づけたい神代紀即ち世紀前後の歴史は舊譯聖書に基づく所であり、佛蘭西一國を説くのに、東洋の島國日本を説く如く孤立的に、しかく簡單には行かない。従つて歐洲諸國に及ばなければ説けまいし、さなくとも「佛國史」の一部に萬國の鳥瞰史を載せる事も必ずしも不當ではないから、今は假りに右の如き推定を下し、これが學的研究は世の専門家に待つ事にする。本書は全部十一卷十冊より成る事蹟記の如くであつて、英俊の著述中その量に於て最も尤大なるものである。が收むる所僅かに上古史中古史の二部であつて、彼が序中に「至萬國史記未有其全備者」と慨し乍ら本書も亦未完成に終つてしまつたのである。誠に遺憾と言はなければならぬ。尤も彼が萬國史を見乍ら萬國史と名付けず、西洋史記と命名したについては、解説者が、曩にそれと推想した如く、底本が所謂本格の萬國史ではなくして「佛蘭西史」の一部の抄譯か、或は大體最初から中古史までの豫定であつたかも知れない爲めか、事情を詳になし得ないが、其の邊多少の推斷が許されさうである。

西洋史では、既に文化五年に佐藤信淵の「西洋列國史略」等が見えるが、英俊の當時萬國云々といふ書名が多く世に現はれてゐるので、これを嫌つて特に西洋の名を冠したと解釋出来ない事もない。本文は全部漢譯である事も本書の特長である。尙英俊の註（茂按）を仔細に檢したならば、彼の此の方面に於ける見界も知られるであらうけれ共、今はこれを略した。本書の校正者明堂村上義徳は男と明記してある如く英俊翁唯一の子息である。榮太郎といひ、嘉永

四年七月の生れであるから、刻成つた明治二年は十九歳であつた。翁四十一歳にしてはじめて儲けた子である。翁の愛は殆んど盲目に近かつたらしい。そしてこれが又榮太郎の將來を誤らせるに至つた一因ではあるまいかと想像するが、英俊が十九歳の一子榮太郎の名を「西洋史記」に列して華々しく世に送り出したのも、翁の息子可愛の心からであつた。

佛學
十
五
三
一
六
卷
八
第
百
一
十
九
頁



佛英獨
三國會話
一册
和本
縱六寸
橫四寸
左開き

三國會話見返

始祖
木
上
英
修
三
三
五
島
松
堂
書
房
古
身
音
片

Nagasaki University of Foreign Studies

始祖
村上英修
卷
三十六
最松堂書店
古興音別

本文 横罫十二行 二十丁
色 墨金
原題簽落刺して不閉恐らく
とありしなるべし。

獨英佛
三國會話

右肩の圓形の朱印左上方に角の朱印ある事例の如し。見返しと本文第一丁の間に扉頁があり、四角の枠を取つて中は空白である。その裏に本文の凡例が次ぎの如く記されてある。即ち佛英獨の順序に同一文を示し、それに夫々読み方を假名にて與へ、その下に譯文を配す方法をとつた。

段上	佛 獨
段中	英 獨
段下	佛 獨

(第一丁のはじめ)
 Bonjour, Monsieur.
 クウト マウニング サア
 good morning, sir.
 グトエン モルゲン マイン ヘエル
 guten morgen, mein herr.
 ウンキマタア
 ヨゲゴサナ

(第二十丁の終り)
 Je vais écrire une lettre.
 アイアム ゴライング ツウ ライト エ レッタア
 i am going to write a letter.
 イヒ ウエルツエ アイネエン ブリエフ シユライベン
 ich werde einen brief shreiben.
 私紙カ初
 手キヲスメ

上掲の如く第一丁より第廿丁に終つてゐる。會話の種數百四題、朝の挨拶、買物、値段、時計、佛蘭西語で話す、年齢、書籍、時(昨晩今朝)天候、手紙といふやうな事が會話の主題となつて居る。その中に vous venez par la diligence? 「アナタ飛脚車ニテヲ出ナサツタカ」に對し Non, je suis venu par le chemin de fer. 「イエ私ハ蒸氣車ニテマイツタ」とか、 Je vous a la poste. 「私飛脚屋マデマイリマス」等時代色が出てゐる面白。I'ai besoin d'une plume emetallique. (I want a steel pen -- ich habe eine stahlfeder.) を「私ハカネの筆ガホシイ」などの類は時人を煙に巻いたものであらう。この原書は何に據つたか。如何なる本より撰出編輯したものであつたか。三ヶ國語の抽出、その譯語等相當の出來榮えを示し、佛蘭西語の読みも從來のものに比しては一段の進歩が見受けられる。

佛英獨の三語便覽に對して、佛英獨の同書の再版本があるといはれてゐる事は本書の存在よりしてもその當然性は十分にうなづける所である。本書は明治五年の稟准、序跋、出版元の印記がないが、他の著書同様須原屋山城屋の共同出版のものであらう事は疑ふ餘地がない。

始祖
村上英修
卷三十九
最村堂書店古具音用

肺及呼吸
 肺中ニ於テ暗黒ノ鮮紅血液ニ變化スル其性質ニ就テ理明至精
 ニ至ラズト雖ニ造化妙カノ徳ニ至重至大ノ作業ヲ供テル一居多ナリ
 ○肺ハ造化妙カクテ所ノ器ニシテ微ノ氣球相ニ連ナリテ組織ニ
 新陳マリ同テ球内ニ含メ氣漸次ニ更代スルナリ○氣管ハ軟骨様ノ輪
 相ニ重ナリ輪狀組織ヲ被覆シテテ口鼻ノ口ニ目リテ外氣ニ接通
 スルナリ○氣管ハ如ク受シテ氣球ヲ納リ餘ル○肺
 ハ第一ニ血管ノ集積ニ成ル此集積ハ殆ント肺中ニ蔓延ス○第二ハ
 氣管ノ後共ヨリ其質甚ク薄シ然レモ血管ノ如クニ蔓延セス○血
 管擴充スル質ト氣管ノ造成分ニ異ナリ○然レモ肺ノ組織造成分ニ
 ノ動體組織ト造成分ニ異ナリ○然レモ肺ノ組織造成分ニ

醫學論文原稿

- 纖維分。岐符里腫 (十六年六月十五日發行)
- 血赤質。批麻觀支腫。矩魯捕利腫 (十六年九月十五日發行)
- 血液ノ赤色 (十六年九月十五日發行)
- 血液ノ脂分 (十六年十月十五日發行)
- (不分明ノ血液成分。血液ノ諸鹽)

- 東京學士會院雜誌第六編 (明治十七年刊)
- 血液ノ分析 (十六年十二月十五日發行)
- 血液ノ分析 (十七年六月十五日發行)
- 疾病ノ血液 (十七年十月十五日發行)
- (血液ノ汚點)

- 東京學士會院雜誌第七編 (明治十八年刊)
- 血管及血液運行 (十七年十二月十五日發行)
- 血液論ノ續 (十八年五月十五日發行)
- (肺及呼吸)

(以上)

以上の如くであるが、この中岐符里腫、批麻觀支腫、矩魯捕利腫の原語は夫々 Fibrin (no), Haematosin (f. Haematosine), Globulin (no) に該當する。

始祖 村上英修 中卷 四十 藏村堂書店 古典音聞

茂亭漫筆

十行野紙八丁よりなり、一丁半に外國貨幣の換算額を示し、第二丁裏より終りまで俳句を連ね、その數百十九句、うち二句の重出のものあり、全句數は百十七句、その他句案成らずして三句の出でざりしもの、第一句にて中止となりたるもの各一句づゝあり。全紙數八葉の殘缺本。故に猶多くの紙數のありし事、従つて、多くの句を加へべき事は明かである。翁の趣味生活方面をうかゞふべき好資料たるを失はない。(全文は文集に收載せり)

本書の成立年代は不明であるが、冒頭の文「亞墨利加人齋來ル云々」の文が多少の手掛りとなる。我が國が下田開港以來、諸外國との交易行はれ、その最初に起つた問題は外國貨幣を如何に我國貨幣に換算すべきかといふ事であつた。この爲めには數次に亘つて種々の協定が爲された。米國との協定は嘉永七年に行はれた。その中に

第二、銀、銀貨一弗を通用銀十六匁と定む

と云ふ一項がある。然しこゝに一つの疑問は「シキユルリンク」とある事で、これは shilling 即英國の貨幣の名である。尤も Webster の辭典によると、米國に於ても使用されてゐたのであるが、それにしては、協定中の one dollar = 銀 16 (gr) 180 のと、本稿 one shilling = 銀 16 匁は客觀的貨幣價值に甚だしい懸隔がある。本文中「公邊ヨリ錯誤アリ」といふ事實も何時の事かつきとめる事は出来ない。従つてこれ等の事實を的確に推定は出来ず、漫筆起稿の年次も明にする事は出来ないが、下田開港後

始祖 木上 英俊 著 卷 四十二 最公堂書店 古典部 反

の事、英俊の再度の江戸生活時代の事に關し、而も「茂亭漫筆」と題した所、又その筆蹟より見て、寧ろ可成後期晩年の筆と見受けられる。

英俊が、漫筆冒頭に外國貨幣の換算額を記した事について思ひ出されるのは、彼の明治十三年の「官有地拜借願書」である。同書中に「抑該品ノ義ハ常々海外ノ輸入ヲ仰キ爲ニ數十萬圓ノ貨財ヲ輸出シ國帑ノ空乏ヲ來スノ一原因ナルモ亦醫術上缺クヘカラサル料タルヲ以テ我財政ノ困難ヲ省ルニ違アラサル」云々と言つてゐる如く、彼は常に國家經濟といふ點にも着眼してゐたのである。この思想が即ち「漫筆」の數字となり願書の文言となつて現はれたのであらう。

茂亭漫筆 卷 四十二 最公堂書店 古典部 反

(附) 達理堂門人名簿

勿論本書を彼の著述隨筆品の中に加へる意志は毛頭ないが、名簿が現存するので附録の意味でその書名のみを掲げる事にした。書名は著者の私に命名したもので原本は無題簽である。猶本書については一言、英俊評傳の達理堂時代の條に添へて置いたので、それを参照していただく事にして筆を擱く。

佛學 寸上 英俊 著 卷 四十二 最公堂書店 古典部 反

Nagasaki University of Foreign Studies

Nagasaki University of Foreign Studies

始祖學村 上英俊 中卷 畢

始祖學村 上英俊 卷之二 歸村堂書房 古典書房

Nagasaki University of Foreign Studies